

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24年 6月 23日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530939

研究課題名（和文） 「読解力」育成のための足場づくりに関する基礎的研究

研究課題名（英文） A Fundamental Study on Educational Scaffolding for Development Reading Literacy

研究代表者

山元 隆春（YAMAMOTO TAKAHARU）

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号：90210533

研究成果の概要（和文）：

児童・生徒の「読解力」育成のために、小学校から高等学校までの児童・生徒の読者反応を多角的に分析し、読者反応の個人的構成と社会的構成との関係性を解明し、「読むこと」の授業における足場づくりのための枠組みを構築することを目的とした。国内外の国語教育学及び読者反応研究関連の文献をもとにして研究を進めた。絵本などをもとにした「読解力」育成のための学習開発論を構築した。米国の理解方略指導論に学びながら「読解力」の足場づくりとしての理解方略指導のあり方を探り、さらに多様な学習ニーズに応じて「読解力」を育成するための支援策を提言し、「読むことの指導」をどのように教えるのかということについての見通しを示した。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of this study was to construct the framework for analyzing many aspects of student's reader responses, to elucidate the relationship between social structure and personal configuration and reader reaction.

To build theory while learning to exchange research results and reader response theory of a burden for the development of "reading comprehension", learning and development for the development of "reading comprehension" was based on visual material, such as post-modern picture book picture books and to construct a theory. In addition, explore the nature of strategy instruction as a scaffolding of understanding of "reading comprehension" while learning to practice leading theory and workshop practice and strategy instruction book club understanding of the United States, "reading comprehension", depending on the variety of learning needs further measures to support the proposals for fostering. Shows the outlook for that explores the issue of the need for "coaching" in literacy education, through the consideration of the workshop literature, that I teach how to "teaching of reading," to grow "Reading Literacy" depicting the development of a framework for performing support.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：国語教育学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：国語教育学、読解力、読むことの教育、読者反応、学習支援

1. 研究開始当初の背景

本研究はわが国児童・生徒の「読解力」育成のために、テキスト（主として文学作品）の叙述に対する小学校から高等学校までの児童・生徒の読者反応を多角的に分析し、読者反応の個人的構成と社会的構成との関係性を解明し、文学の読みの授業における足場づくり(scaffolding)のための枠組みを構築することを目的としている。

従来の国語教育学のなかでは、このような問題を、主として「読者反応理論」に基づく研究と実践が担ってきた。そこではあるテキストに対する児童・生徒の反応を調査する研究が蓄積されている。この点について、申請者は山元(2005)で日本と英米における「読者反応理論」の展開を踏まえた研究動向を詳細に検討した。また主として米国の読者反応研究のなかで、ランガー(Langer, J.A.)やビーチ(Beach, R.)などの研究が、読者反応の調査研究を試み、テキストと読者との関係性の解明を行っている。とくにビーチによる周到な概観については既に申請者が翻訳し、紹介を行ってきた。

従来の国語教育学における「読者反応研究」は、テキストに対する読者の書き言葉による反応を分析的に捉え、検討するものが少なくなかった。このため、個々の読者のテキスト解釈の内実を明らかにするものにはなっても、それらが授業などの社会的な場面でのようにかたちづくられるのかということについての解明は十分に為されていない。米国をはじめとする研究動向を検討してみると、ビーチら(Beach et al.,2008)では、おもに読者反応理論と社会文化的学習理論に依拠しながら、子どもの読みの学習指導の問題における「足場づくり」の問題がクローズアップされており、そこでは教師自身の「読み」に関する考えを省察していくことの必要性が強調されている。サイプ(2008)の研究などを踏まえて、「読み」に関する各自の考えの省察の基礎となるのは「グループ・ディスカッション」で交わされる反応のやりとりの研究であると考え、その方面の研究を進めてきた(山元,2006)。本研究はその研究を授業理論の方向へと発展させるものである。

一人の読者としてテキストに反応する場合と、同じテキストに対して小グループで反応する場合、さらに、授業場面等での大人数の場で反応する場合のそれぞれにおける読者の反応の内容を比較検討し、児童・生徒がテキストを読むということの内実を明らかにしていきたい。そのことによって、児童・生徒の読者反応をとらえる方法や、読むことをつまづきをどのように見出していく方法の確立が可能になる。そして、児童・生徒が、授業という場において、教師や友だちとわか

わりあいながら、各自の読みの課題を克服しながら学習を深めていくために必要な足場づくりのための「道具(tools)」を開発していくことで、「読解力」を育成していくための指針を得ることが可能になる。こうしたことが、初等・中等教育段階における「読むこと」の確かなカリキュラム構築には不可欠であると考える。

(文献)

山元隆春(2005)『文学教育基礎論の構築—読者反応を核とするリテラシー実践に向けて—』溪水社。

山元隆春(2006)『グループ・ディスカッションを中心とした読むことの学習開発に関する基礎的研究』科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書

Beach, Richard. 山元隆春訳(1999)『教師のための読者反応理論入門』溪水社。

Langer, Judith A.(2008) Envisioning
Beach, Richards et al.(2008) Teaching Literature for Adolescents, LEA.

Sipe, Lawrence(2008) Storytime, Teacher's College Press.

2. 研究の目的

本研究は従来の「読者反応理論」中の諸研究を踏まえながら、とくに日本語のテキストに対する会話場面での子どもの口頭の反応を実証的に明らかにしつつ、読みの社会的文脈のなかで一人ひとりにどのようなかたちで「読解力」を育成していけばよいのかということの解明を目指している。学習者が、一人の読者としてテキストに反応する場合と、同じテキストに対して小グループで反応する場合、さらに、授業場面等での大人数の場で反応する場合のそれぞれにおける読者の反応の内容を比較検討し、児童・生徒がテキストを読むということの内実を明らかにすることを目的としている。そのことは国語科の授業において教師が子どもたちの「読解力」を育成するために準備する「足場づくり(scaffolding)」の具体的なあり方を提案し、「読むこと」のカリキュラム構築の礎を確かなものにするようになるだろう。

3. 研究の方法

国内外の国語教育学及び読者反応研究関連の文献をもとにして、幼児期から青年期初期の読者反応を捉えるための理論的・仮説的枠組みを構築する。

平成21年度は、国内外の国語教育学及び読者反応研究関連の文献(Sipe,2008ほか)をもとにして、幼児期から青年期初期まへの読者反応を捉えるための理論的・仮説的枠組みを構築する。

また、いくつかの学校において、読者反応

の実態を捉えるための予備調査を行い、その調査結果の分析に基づいて、理論的・仮説的枠組みを修正しつつ、本調査を行うための調査デザインを作成する。(読者反応データの採取・分析)

平成22年度以降は、児童・生徒の読者反応を多角的に捉えるための本調査を実施し、その調査結果の分析を行う。とくに授業場面等での読者反応調査を行うにあたって、国語科授業研究における読者反応分析の現状を踏まえるために、国語科授業研究関係文献が一定量必要となる。

本調査の結果に関する分析・考察に基づいて、幼児期から青年期初期に至る児童・生徒の読みの発達の様子、及び個人的読みと集団的読みとの交渉に関する仮説を導く。

以上のような、「読むこと」の内実を捉える調査研究に基づいて、授業のなかで児童・生徒の「読解力」を育成していくための「足場づくり」のために必要な道具(ツール)の開発を行おうとしていること。国語科の「読むこと」の授業及びカリキュラムに関する提言を行う。

4. 研究成果

「読解力」育成のための理論をおもに読者反応研究の成果や交流理論に学びながら構築し、絵本やポストモダン絵本などの視覚的素材をもとにした「読解力」育成のための学習開発論を構築した。さらに、米国の理解方略指導論やブッククラブ実践やリーディング・ワークショップ実践に学びながら「読解力」の足場づくりとしての理解方略指導のあり方を探り、さらに多様な学習ニーズに応じて「読解力」を育成するための支援策を提言した。リテラシー教育における「コーチング」の必要性の問題を探り、文学ワークショップの考察を通して、「読むことの指導」をどのように教えるのかということについての見通しを示し、「読むこと」の力を育てるための発達支援を行うための枠組みを描いた。上のような成果を、A4版178頁の報告書に、次のような4章構成でまとめた。

第1章 「読解力」を育成するための理論

第1節 読者反応理論の新しい展開と「読解力」育成の課題／第2節 「読解力」育成の基礎を問う「交流理論」／第3節 「読解力」育成の理論-「生きた回路」の生成と要点駆動の読み

第2章 「読解力」を育てる学習開発論-絵本・絵本論を中心に

第1節 絵本の受容理論-ローレンス・サイプを中心に／第2節 審美的理解とヴィジュアル・リテラシー／第3節 ポストモダン絵本論からみた文学教育の可能性

第3章 「読解力」の足場づくり-理解方略指導の探究

第1節 「読解力」育成のための方略／第2節 理解するとはどういうことなのか／第3節 長編小説を核としたリテラシー教育-『テレビシアにかけける橋』を用いたブッククラブ実践の検討

第4章 「読解力」を育てるための支援

第1節 国語学習のためのリテラシーと「コーチング」／第2節 文学の教え・学びをどのように教えるか／第3節 「読解力」育成の足場づくり-「読むこと」における発達支援

この報告書に記した研究成果をまとめると次の通りになる。

①「読解力」育成のためには、基盤となるデータが必要である。読者反応理論に依拠した調査研究が例外なくそうであるように、まずは児童・生徒がどのような読みの現状にあるのかということ調べていく必要があることがいまさらながら痛感された。研究成果報告書の第1章で論じた、カナダの研究書のなかに子どもの「読み」観があらわれており、それに対する処方箋をどのように用意すればいいのかという点が探られていた。第2章で扱った各論考はいずれも絵本を対象としたものだが、絵本に対する読者反応を把握するための「文学的理解のダイナミクス」(サイプ)や読者の口頭での反応を捉えるための「記述的フレームワーク」(キーファー)が示されていた。また実際の絵本に対する子どもと教師のやりとりの分析を行われていた(アリズプとスタイルズ)。ポストモダン絵本『白黒』(マコーレイ)に関しては謎解きのようなかたちで子どもたちが話し合いながらこの絵本の意味を捉える過程が分析されていた(マクレイ、パンタレオ)。第3章で扱ったキーンの本では、多くの教室兆践の観察から得られたことが逸話のかたちで示され、そこから得られた、「理解」とは何かということについての知見が提示されていた。いずれも「読者反応」を詳しく検討することによって、「読解力」育成のための知見が得られることを教えている。

②「読者論」や「読者反応理論」に導かれる学習指導の考え方が具体的に示されているという点も重要である。もちろん、1970年代を中心に提唱された「読者反応批評」は、ポストモダンの文芸批評の一つであって、決して文学教育の方法論そのものではない。しかしながら、「読むこと」の授業を設計するために、目標・内容・方法を吟味するためのレンズをもたらすものである。そこにとどまらずに、「読むこと」の授業を、一作品の読解にとどめずに、さらに多くの作品を読み進めるための運動にしていくためのイメージを、この報告書で扱った諸論は教えている。第4章で扱った「ワークショップ」の提案は、第4章第2節で論じたシェリダン・プラウの

『文学ワークショップ』に述べられているように、「行為遂行的リテラシー (performative literacy)」の形成に向い、「知の活性化 (enabling knowledge)」をいざなうものである。「読者反応」を核とする学習を開発していく方向性の一つを明確に示したものと考えること力1できる。

③第1章の冒頭で述べたように、「読者中心 (reader-centered)」から「読者準拠 (reader-based)」への転換が、2000年以降の読者反応的教授法の課題であるとするなら、第4章第3節でマクイワンの著作にもとづいて述べたように、一人一人の読者の課題に即した指導法を工夫していく必要がある。それは、個別の課題と集団の課題の双方を扱っていく授業の姿を追い求めていくという古くて新しい課題に取り組むということである。そのためのヒントとなるのが、第3章第2節や第3節で扱った、キーンやラファエルらの理論と実践である。キーンの言う「リテラシーの練習場」(「技術の時間」「構成の時間」「促進グループ」「振り返りの時間」の四つの構成要素からなる)としての授業を組み立てていくことは「読者準拠」の学習を切り開いていく上で重要である。これは、従来も、すぐれた単元学習の実践のなかで組み込まれてきたことであると思われる。

④第4章では、わが国でほとんどなじみのない「リテラシー・コーチ」という話題を扱った。実現の難しい問題ではあるが、アメリカにおけるこの専門職導入の試みは、リテラシー形成の「足場づくり」のためのヒントを与えるためのものである。クロエという「リテラシー・コーチ」が「一つのテキストには複数の解釈を理解させる」ために用いていた「文学ワークショップ」というアイデアは、教室で実現可能な「足場づくり」の一つであると考えられる。

⑤日本での教室実践の展開は十分に図ることができなかった。この点をさらに具体的に調査し、「読解力」育成の足場づくりの具体的な姿を提案していくことは、今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

①山元隆春, 読解力養成の理論—読者反応論からの提起, 中学校国語指導シリーズ 充実した読解力養成のために, 学校図書, 2011年, pp. 1-8, 査読無.

②山元隆春, ポストモダン絵本論から見た文学教育の可能性, 国語教育研究, 52, 2011年, pp. 72-93, 査読無.

③山元隆春, 絵本は、子どもが読者となることを、どのようにはげますのか, 国語科教

育, 2011年, pp. 7-8, 査読無.

④山元隆春, 文学の教え・学びをどのように教えるか, 論叢国語教育学, 復刊2 (通巻7), 2011年, pp. 61-79, 査読無.

⑤山元隆春, 読むことの学習指導における「学習のてびき」の源流, 広島大学大学院教育学研究科紀要, 第二部 文化教育開発領域, 58, 2010年, pp. 83-92, 査読無.

⑥山元隆春, 長編小説を核としたリテラシー教育, 論叢国語教育学, 復刊1 (通巻6), 2010年, pp. 88-100, 査読無.

〔学会発表〕(計5件)

①山元隆春, 理解するとはどういうことなのか, 第120回全国大学国語教育学会京都大会, 京都教育大学, 2011年5月

②山元隆春, 絵本は、子どもが読者になることを、どのようにはげますのか, 第119回全国大学国語教育学会鳴門大会, 鳴門教育大学, 2010年11月

③山元隆春, ポストモダン絵本論からみた文学教育の可能性, 第118回全国大学国語教育学会東京大会, 東京学芸大学, 2010年5月

④山元隆春, 「読解力」養成のための支援に関する基礎的研究, 第117回全国大学国語教育学会愛媛大会, 愛媛大学, 2009年11月

⑤山元隆春, ヴィジュアル・リテラシーと審美的理解, 第116回全国大学国語教育学会秋田大会, 秋田大学, 2009年5月

〔図書〕(計5件)

①田中実・須貝千里共編著, 『文学が教育にできること』, 教育出版, 2012年, 350頁,

②山元隆春, 『「読解力」育成のための足場づくりに関する基礎的研究』, 平成21年度~23年度科学研究費補助金研究成果報告書, 178頁, 2012年

③全国大学国語教育学会編『新たな時代を拓く中学校・高等学校国語科教育研究』, 学芸図書, 2011年, 320頁.

④森田信義・山元隆春・山元悦子・千々岩弘一共著, 『新訂 国語科教育学の基礎』, 溪水社, 2010年, 354頁.

⑤全国大学国語教育学会編, 『国語科教育実践・研究必携』, 学芸図書, 2009年, 355頁.

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山元 隆春 (YAMAMOTO TAKAHARU)

広島大学・大学院教育学研究科・教授

研究者番号: 90210533

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし